

1 単元名 生きもの なかよし 大作せん

2 単元設定の背景

教材観

2年生の子供達にとって、身近な生き物（昆虫や小動物など）と直接関わることは、自然への親しみや命の尊さを実感する上で非常に重要な経験である。本単元は、子供達が自ら生き物を探し、捕まえ、飼育する活動を通して、その生態や成長の様子に気づき、愛着をもって関わることをねらいとしている。生き物は日々変化し、予想外の動きを見せるため、子供達の知的な好奇心や探究心を強く刺激する魅力的な教材である。また、飼育の過程で「どうすれば元気に育つか」を試行錯誤したり、友達と教え合ったりすることで、他者への思いやりの心や、命を大切にすることを養うことができる教材であると考えている。

子供観

事前アンケート（令和8年5月28日実施27名）によると、これまでに生き物を飼育した経験のある子供達は25名であり、休み時間に生き物をつかまえ、家からもってきた餌をあげる姿が見られる。生き物を飼うことに対して「楽しい（楽しそう）」と答えた子供達は26名にのぼり、本単元への期待感や関心は高い。一方で、生き物を触ることに対して「あまり好きではない」「苦手」と答えた子供達も2名存在し、配慮が必要である。また、育ててみたい生き物としては、バッタやダンゴムシ、本校の観察池に生息するヤゴへの関心が高く、これらを対象として飼育活動をスタートさせる。

集団観

互いの気付きやこだわりを認め合い、共通の願いに向かって生き生きと関わり合える授業集団を目指している。普段の授業から、友達のつぶやきに「なるほど。」「同じだよ。」と反応する姿が見られ、素直に認め合う土壌が育ちつつある。本単元では、生き物の命を前に「元気に育てたい。」という共通の願いをもたせる。飼育のトラブルに直面した際、一人の困りごとを学級全体の問いとして共有し、「こうすればいいよ。」「図鑑に書いてあったよ。」と、これまでの経験や知識を出し合って支え合える関係性を紡いでいきたい。虫が苦手な子も得意な子も、それぞれの方法で命の尊さに触れ、共に解決策を考え出すことで、集団としての一体感と、協働的な実践力を高めていく。

指導観

子供達が生き物の命と向き合い、「元気に育てたい。」という願いをもち続けられるよう、連続性のある環境構成と見取りを行う。単元前半では、身近な自然での捕獲を通して親近感を高め、個々の興味に応じた飼育環境を整える。中盤以降、必ず直面するトラブルをあえて貴重な学びの機会と捉え、子供が自ら解決策を「調べる・試す」ための図鑑や道具などの環境を教室内に意図的に仕掛ける。試行錯誤を繰り返す過程で、生き物の育つ場所、変化や成長への気付きを促し、命を大切にする心と守ろうとする心を育てていく。

3 単元の目標及び計画（全14時間）

■単元の目標

生き物を探したり飼育したりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ、それらが生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみをもって、大切にしようとすることができるようにする。

■単元の計画

第1次 学校の近くの生きもののことを話そう・・・・・・・・・・2時間

第2次 生きものをさがしてそだてよう・・・・・・・・・・10時間（本時7/10）

第3次 生きもののことをふりかえろう・・・・・・・・・・2時間

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
身近な生き物を探したり飼育したりする活動を通して、生き物がいる場所や、変化・成長の様子、生命を尊ぶことなどに気付くとともに、生き物の扱い方や飼育の仕方が分かっている。	生き物の様子や自分の関わり方について考え、特徴に合わせた飼育環境やお世話の仕方を工夫するとともに、活動を通して見つけた生き物の特徴や成長について、自分なりの方法で表現している。	身近な生き物に親しみをもち、進んで飼育活動に関わろうとするとともに、生き物の命を大切にしながら、最後まで責任をもって世話を続け、これまでの活動や自分自身の成長を振り返ろうとしている。

5 本時の学習

■目標 身近な生き物の様子を観察し、それぞれの困りごとや元気になる方法について伝え合うことを通して、生き物の特徴や育つ場所に合わせたお世話の仕方に気づき、進んで飼育活動に生かそうとする。

■レジリエンスを発揮している子供の姿

生き物の様子を繰り返し確かめ、その特徴や育つ場所に合うお世話の仕方を最後まで熱心に考える姿。

■学習過程 ※ (全) (小) (個) : 学習形態 (全 : 全体の場合 小 : 小集団 個 : 個人) ㊟ : 留意点 ㊦ : 評価の観点 (方法)

子供の活動	教師の働きかけとねらい	集団
(1) 前時までの飼育の様子(嬉しかったことなど)を思い出す。 ・バッタが元気に飛んでいるよ。 ・餌をたくさん食べてくれるよ。	(1) 前時までの飼育活動の様子を写真で提示することで、その中で生まれた新たな問題について想起できるようにする。	(全) 困り感を全体で共有できるようにする。
(2) クラスの生き物たちの困りごとを知る。	(2) 前時との比較を通して、時間の経過に伴う飼育環境のさらなる変化に目を向けられるようにし、前時で得た困り感をさらに切実な問題意識へと更新できるよう促す。	(全) 一人一人の切実な問題として、全員で解決しようとする意欲を高めることができるようにする。
生きもののようすをよく見て、元気になる方ほうを見つけよう。		
(3) 生き物の様子を観察したり、お世話をしたりする。 ・バッタがあまり草を食べてくれないな。草がカラカラだからかな。 ・ダンゴムシが動かなくなってしまったよ。動きにくいのかな。 ・たくさん糞をするようになってお家きたないな。きれいにしたいな。	(3) 新たな困りごとに子供が気づき、自分の言葉で記述できるように支援する。 ・匂いや手触りなど五感に働きかける声かけを行うことで、小さな異変への気づきを促すようにする。 ・異なる生き物を飼育している子供の様子を伝えることで、「住む環境」や「食べ物」の違いに目を向けることができるようにする。	(個) ⇄ (小) 相手を意識した聞き方を大切にし、考えを伝え合うことができるようにする。
(4) 生き物が元気になる方法を考える。 ・草が枯れないように、濡れたペーパーにくるんでみたよ。 ・ダンゴムシは湿ったところが好きなんだ。霧吹きをかけてみよう。 ・糞をきれいに掃除してあげよう。ティッシュでとれるかな。	(4) 図鑑やお世話の道具を設置しておくことで、自ら調べ、必要な道具を選んで試すという主体的な課題解決の姿を引き出すようにする。 留生き物を触ることが苦手な子供も、「図鑑から調べる」「必要な道具を選んで友達に渡す」といった多様な方法で活動に参加できるようにする。 留生き物の様子に関心をもち、その特徴を捉え、世話の仕方を考えている。	(個) ⇄ (小) 自分の考えと友達の考えを比較しながら、よりよい考えをもてるようにする。
(5) 生き物の特徴や育つ場所に合わせたお世話の仕方に気づき、自分のお世話に生かせることを考える。 ・生き物によって、住んでいる場所や好きな食べ物が違うのだな。 ・好きな場所をつくったり、好きな食べ物をあげたりすると、もっと元気になるぞ。	(5) それぞれの生き物のお世話の仕方を板書し分類・整理することで、友達のアイデアから、自分の生き物にも生かせる工夫があることに視覚的に気付けるようにする。 ・子供から出た気づきを全体に問いかけることで、生き物にはそれぞれ適した環境があることへの気づきを促す。	(全) 友達の考えから新たに気付いたことを全体で共有できるようにする。
(6) 本時の学習を振り返る。 ・生き物に合ったお世話の仕方があることがわかったので、バッタが好きな草を入れてあげたいです。 ・ダンゴムシの好きな湿った地面になるように、毎日霧吹きをします。	(6) 生き物の命を大切にしようとする具体的な記述を価値付けることで、良い活動を全体に広げ、明日からの飼育活動への意欲を高める。	(個) 本時の自分の学びを振り返り、次時への意欲を高めることができるようにする。